

●文月に入りて台風3号の慈雨を給はる一日限り

河村郁子

「梅雨に入るも雨らしき雨降らぬまま」（一首目）とあるように、今年の（関東の）梅雨は、暑いまま雨がなかった。八月になってようやくの雨が台風の雨。暑さは七月半ばで失速、一号は四月発生だったが、台風もやっと三号というところ。給水制限の記憶もある。そこで慈雨、であり、給はる、なのだが、それも一日限り、というそっけなさ。嘆息が伝わってくる。それでも今やお天気は列島全体なので、一連に、北海道の大雨、大分の豪雨・洪水、ほか心配りはある。いろいろな心騒ぎなのだ。

●朝曇ゆつくりふふむ緑茶かな

谷垣満壽子

朝曇（晩夏（七月））は、季語としては明治末期からという。暑くなる日は朝のうちから靄がかかって曇ることが多い。「早の朝曇」という諺もある。ゆつくりふふむ、にはその日一日の過ごし方（仕事）を少し考えているようなところ、がある。順直な句。この関係、例句「朝曇日の出ぬ内の一仕事」（森本順子）では、より直接に季語を受けている。なにがあっても緑茶から朝を始めている評者にも、共感がある。この句の直前の句もいい。

剥き終へて蚕豆のかささなかり

●信濃金盃小暗き胸を照らしけり

新野祐子

信濃金盃は高山植物。黄色い、盃状の花、だが花に見えるのは萼片だという。アイゼン、雪渓、飯豊嶺、お花畑、夏霧、稜線、等々、一句ずつが、点々と、また順々と山登りをしている。掲出句は何か影になっていて小暗き、なんだろうか。ネットの写真で、ザイテングラート沿いのお花畑のシナノキンバイをみた。明るい。

一景ずつに、調子を刻む、空気感がある。こんなこともある。

道に迷い琴弾鳥に囀される

●始まりは終はりのはじまりこの夏に「書物屋ほんべえ」店を閉ぢたり

布宮慈子

始まりも終わりもしること、それはさびしいものとなった。夏に閉店した書店、それを受けての歌が前半の五首になる。「開店の年」の、作者にとつては「若き日の一年間を手伝ひき」（三首目）。かわりがあり、また、思いがある（「四十年ちかくも店は愛されて 飯野さんと店おつかれさま」（四首目））。地方で書店はなかなか生き残れない。終わったのも一つのこだわり、とあってよいようなものだろう。それが故郷でもある。

「昨夏のが手」が触れて、かわりをもった仔猫のその後も夏の思い出の一つだった（四首）。

●昼間でも星の影さすという井戸に星の井鎌倉十井の一つ

小野澤繁雄

「鎌倉」と題した一連は、久しぶりに自分が鎌倉を巡っているようで楽しかった。鎌倉は不思議なところである。何回行っても違う顔を見せてくれる。歴史のある、というか言い伝えがそのまま生きている場所が多く、掲出歌もその類だろう。住んでいる人には迷惑かもしれないが、たまに訪れる者にとっては魅力のある場所なのである。

鎌倉は極楽寺坂切り通し若葉のみちは声ににぎわう

●長袖にもんぺ姿のいでたちに草むしりせり一時間ほど

丸山弘子

東京は中野区に住む作者が、もんぺ姿になるとは！ いいなあ。もんぺは涼しいにちがいない。草むしりには打ってつけた。たいへんな仕事は「格好」から決めるのがいい。現代の生活ともんぺ。取り合わせの妙が生んだ凛々しさがある。次の一首はアジサイの剪定について丁寧うたう。アジサイは翌年、さらに翌々年の花芽を考えて剪定するらしい。調べてみてわかったこと。

時季すこし遅れたりしが来年の花を思ひて紫陽花を剪る

●眠れざる夜を眠れぬまま起き出でて航空障害灯の赤き灯見つむ

結城 文

都心の集合住宅からであろうか、高いビルの上に点滅する赤い灯がある。それを「航空障害灯」と呼ぶのを知った。眠れない夜の孤独感が出ていると思う。寂しいなどという感情ではなく、もつとさめた見方。次の歌も、生きることの描写である。

いち日はひと日と過ぎぬ存在の小さき点滅繰り返しつつ

夕空に投げてはしほる網のやうひるがへり飛ぶ黒き鳥群れ

●蟬のこえいまだ声なく七月の半ばを過ぎて異常なる夏

池田桂一

異常な気候とは聞いて久しい気がするが、どの程度の異常なのだろうか。作者は自然の変化に耳を傾ける。生き物は環境の変化に敏感だ。猛暑との長期予報も、土地によってさまざま。当たるとは限らない。今回の一連は、聴覚による歌が多く見られた。安達太良への山行は健康的な歌。

赤松の木蔭をえらび給水の二度目の休憩安達太良山行

●両の手を広げしほどの庭にして茗荷は花を付けておりたり

市川茂子

広くない庭だと断りながら、作者は季節ごとの変化を歌にする。食べられるものが庭にあるのはうれしいものだ。茗荷とてタイミングを逃せば食するには向かなくなる。毎日の観察がたいせつ。

連勝をつづける少年棋士あれば今日は如何にとニュースを待てり

話題となった藤井聡太四段は中学生だ。昨年十二月のデビュー戦から無敗で、ことし六月までの連勝は二十九だという。明るい話題に反応し、歌にする。できそうで、なかなかできないものだ。